# 普段着のわたしたち

愚息の通う幼稚園園庭の誕生像。

毎朝、この前で「誕生さま、お釈迦さま、おはようございます」と挨拶をして教室に向かいます。

一人でも脱帽してペコリと頭を下げている後ろ姿を見ると、愛おしい気持ちが溢れます。４月から年中組になり元気に通っています。

訶梨帝母

タバスコが好きです。タバスコと言えば赤色の方が有名ですが、緑色のタバスコはご存知でしょうか？　ハラペーニョという唐辛子のタバスコです。酸味の中に旨味を感じさせる味わいです。辛さはあまり無く、癖になる旨さです。何にでも合うのでお気に入りなのです。

征阿

雑草はコンクリートの隙間などに、あえて生えたいそうです。テレビでみました。

他の草と光を奪い合う必要がないからだそうです。新しく舗装された町道からアスファルトを突き破って草が生えてきました。以前の私であれば、その光景を見て「生きる勇気」をもらったことでしょう。今は「辛さ」を感じます。綱渡りの生活に疲れてきました。

俊徳丸

左手薬指を痛めました。接骨院の先生の診断は腱鞘炎。一番使わない指だと思っていたのですが、力が掛からないように意識すると不自由この上なしです。左手薬指だけを使うことは稀ですが両隣の指と一緒になって働いてくれているのです。

雑草が伸びるこの季節、除草剤の散布機を使いました。右手に軽いノズルを持って、左手でポンプを強く押さないと液が出ません。10 人兄弟の中で一番目立たない存在の左手薬指に「早くストライキを止めて欲しい」と頼む今日この頃です。

迷走坊

『友引町内会通信』はパソコンやタブレットでもお読みいただけます。検索は http://www.daigoji-temple.jp/ 「友引町内会通信」をクリックしてください。寺務局

# お金を拾って・・・

朝早くに散歩をしました。散歩と言うよりはウォーキングと言った方がよいかもしれません。やや早足で、じっと前方を見ながら、歩いているのですから、これを散歩とは言いません。散歩なら、あっちを見たり、こっちを見たり、意味もなく立ち止まることすらあります。

前方をじっと見て、といっても、まわりの景色が視界から消えるわけではありません。まわりはよく見えています。

やがて、道ばたの電柱の陰で、草に引っかかるようにして震えている紙切れが視界に飛び込んできました。視線は分け隔てなく前方に向かっているようでも、いろいろ複雑な識別作用をしているものです、それはまぎれもなく新札の五千円でした。

ためらうことなく拾い上げ、まわりを見回しました。一枚だけ、というのが疑問に思われました。どうして五千円なのかも謎です。まわりには新札が、それも一万円札が、こぼれるように散らばっていそうなものなのに、五千円札が一枚だけです。この現実をこれ以上考えても、納得のいく答えは見つかりそうもありません。

これを落としたはずの人影は見当たりません。というよりも、あたりには人っ子一人いません。昼間ならクルマがひっきりなしに通るような道路なのに、その時間は人も車もいません。

さあどうするか。心中これをネコババする気は毛頭ありません。選択肢は二つです。警察に届けるか、誰かに渡すか。誰かに渡すと考えたのは、どうしてだかわかりません。

警察に届ける案は、これもどうしてだか、すぐに消えました。誰かに渡すというその誰かには、もちろん元の持ち主も含まれますが、持ち主の特定は不可能です。あたりには誰もいないのですから。

新札を折りたたむのがなんだか「かわいそう」に思えて、そのまま、両手で両端をつまんで、中断したウォーキングを再開しました。しばらく歩いていると、近くにお宮さんが見えてきました。「そうだ」ピーンとひらめきました。元の持ち主に御利益（ごりやく）がありますようにと、拝殿の賽銭箱に五千円札をスーッと投げ入れました。

何日かのち、いつも遊びに来る学生にこのことを話したところ、間髪を入れず反応がありました。タメロで。

「ばかな！パチンコ屋か、焼き肉屋にいってまうにきまっとるは！あーもったいな」まことに即物的です。

あの五千円札がどうなったかに関心はありません。ただ、五千円札がどのようないきさつで元の持ち主の手を離れて迷子になったのか、あの日起こったはずのドラマは謎のまま、気にかかりますが。

（散歩道）

先日、祖母の忌明けを終えました。無事に三途の川をモーターボートでぶっちぎりで渡って行ったことと思います。何せ愛情の限りを尽くした孫（私）に送られたのですから。

祖母は大正十五年生まれ、寅年らしい強い人でした。父が二十歳の時に祖父の後妻に来たそうですが、そのあと嫁いできた母やその後産まれた私からすれば、何ら遜色のない義母であり祖母でした。

自らの意思で実子を持たなかった祖母は内孫である私に全力の愛情を注いでくれました。幼稚園や小学校の催し、ピアノや箏の発表会があれば誰よりも大騒ぎで、当日は母よりも派手な出で立ちで一緒に写っている写真がたくさん残っています。

彼女が私に買い与える洋服は、たいそう華美なものでした。フリル、リボン満載、お袖は提灯のように膨らんだもの。小学校の入学式にそんなワンピースと赤い革の編み上げロングブーツを履かされ登校した為に、先生から「明日からは運動靴を履いていらっしゃい」と言われたのを記憶しています。「おばあちゃん、このブーツは学校に履いてっちゃだめだって～」「まあ、そうなの？体操の時間だけ履き替えればいいじゃないねぇ」なんてやりとりでした。正月明けの始業式にはラビットの毛皮を着せられ登校しました。今の時代だったら私は絶対いじめに遭っていたでしょう。

## こもりうた㊵

そんな可愛らしい私がいつまでも続くはずもなく、自我がムクムクと芽を出してからは、祖母の買ってくる洋服を全否定。もっぱらジーンズで登校していました。寂しいと思ったか、成長したと思ったか。両方だったでしょうね。

成人してからも小言は続き、休みの日にジャージ上下でゴロゴロしていようものなら、勢いよく叱責されました。「若い娘がなんて格好！ちゃんと着替えて人を喰ったくらいの紅を指しなさい！」と。確かに祖母はいつも身綺麗にしていました。家族でもノーメイクの顔はほとんど見たことがない程です。「明治大正の女はズボンは履かない。空襲の時だけよそんなモノは。誰よりも早く起きて身支度を整え、皆が寝てから化粧を落とす。」というのが持論。齢七十歳を過ぎてもスカートにヒールで背筋を伸ばして歩く「モガ」でした。

そんな彼女も晩年は認知症を患い施設で五年ほど暮らしました。ある日、私を見て「あら？どこかでお見かけした事あるわね。どちら様？」と言われた時には驚愕。帰宅してからさすがに悲しくて泣けました。

六歳の時、祖母に手を引かれ箏を習いに行ったのが現在住職を務めるお寺。それが縁で今の私があります。

旅立ちの時、ボケた祖母から元の祖母に戻り、私があげるお経を聞いて何を思ったことでしょう。貴女のおかげ。感謝しています。

訶梨帝母

# 人生最期はアナログで…

ＮＨＫ-ＢＳで久しぶりに映画『おくりびと』を見ました。上映されていた時には４回も劇場に足を運び、僧侶である私も「おくりびと」の一員であることを深く認識させてくれた作品です。感謝しています。今回は所々カットしてありましたが堪能いたしました。笹野高史が演ずる火葬場のシーンでは、やはり涙があふれました。棺が炉に入っていくシーンです。見事に旅立ちの門の扉を開け「門番」を演じていました。ガチャガチャという棺が炉に入っていく金属音。次に扉が閉まって行く機会音がそのシーンを引き立ていました。「旅立ったのだな…」と、遺族を納得させてくれる音だと感じます。

ちょうど15年前の3月24日に亡くなった父の葬儀を思い出しました。火葬場の横は河川の堤防で桜の並木道でした。それが満開で青空が広がって穏やかな昼下がりだった事を記憶しています。我が町の火葬場は小さく古く、父の火葬の時も映画よりもくたびれたガチャガチャ音と扉が閉まる音がしました。父は昼間、冬の間室内にあった鉢物を手入れし外に出しその夕方に突然死しました。友引の関係で翌日が通夜式となり徹夜でその準備をしました。日頃交流があるお寺さんに助けてもらい父を無事におくりだすことができたのです。私は安堵して人目をはばからず法衣のまま控室で大の字で寝込んでしまいました。

ただ父の旅立ちを見守ってくれた町の職員さんが作業服だったことが残念に思いました。笹野さん演ずる方のように門番として制服と帽子を着用して欲しかったです。職業柄、色々な火葬場へ行ってみると、その自治体がどんな所であるか見えてくるように思います。思いやりある「やさしい町」であったりとかです。私は町長さんや役場の方にその制服着用の事を何回かお願いして２年後に実現しました

先日葬儀式の後、岐阜県内のある火葬場へ行きました。新築されたばかりの火葬場のようです。とてもお洒落な場内で、ここでゆったりとコーヒーを飲んでも違和感のない室内です。霊柩車が到着し棺が移動式寝台車へ移されます。今までですとそこの職員の方が手で押して窯まで移動していました。最新式のここは違いました。寝台車に誰も手を触れていないのに窯のある方向にとても静かに動き始めました。普段でしたらイライラしてしまう程のゆっくりした速度です。私の読経が終わりロボット的その寝台車は再度ゆっくりと動き始め、お洒落な扉が開き寝台車は音も立てずその奥へ吸い込まれて行きました。私は、作業着姿でも良いから、ガチャガチャという音がするアナログ式が良いかな…

西暦 2038 年、予想では、日本全国で火葬場不足が深刻な問題になるそうです。　俊徳丸

# 『私説法然伝』（４０）

王家と平家の時代⑤

先月号では平忠盛とその子の清盛について書きました。今月号はその続きについて書きます。

【平清盛は父・忠盛の築き上げた基盤を受け継ぎ、軍人としても政治家としてもまさに「日本一」に相応しい功績を上げる事になるが、その人生は順風満帆というわけではなかった。実母は諸説あるが、通説となっているのは白河帝に仕えた女房で、清盛が幼い頃に死亡していると思われる。忠盛の正室は院の近臣・藤原宗兼の娘の宗子であり、宗子の子である家盛がいた。清盛が平氏一門の棟梁となれる可能性は低かったらしい。しかしながら、幼い頃の清盛は白河帝の寵愛を受けた祇園女御の庇護下で育てられている事や、当時から白河帝の落胤ではないかという説もあったらしく、それらの影響があったのかは不明であるが、異母弟の家盛が若くして亡くなった事もあって清盛が伊勢平氏一門の棟梁となった。

清盛の人生を大きく変える事になったのが、平治の乱である。後白河帝と信西入道による保元の新政に不可欠となったのが新たな安全保障体制である。すなわち京の都の治安維持と荘園の統制ならびに各勢力への牽制と統制の必要性に迫られていたのである。その為には北面の武士の最大勢力であった平氏一門の軍事力に頼らざるをえなかった。信西入道は清盛との結びつきを強め、厚遇する。平氏一門はこの時点で既に五カ国の受領となっており、その勢力は急速に拡大していった。後白河帝の政権は信西入道を中心とした政治体制であり、その政治体制の権力の保持の要となったのが平氏一門の軍事力であったのである。

そこに新たな政治勢力が登場する。鳥羽帝の寵愛を受け、鳥羽帝から莫大な荘園を相続して当時の最大勢力でもあった美福門院得子の勢力である。美福門院は信西入道との「佛と佛との評定」によって美福門院の養子である東宮・守仁親王を擁立し、二条天皇として即位させる。もともと後白河天皇即位は守仁親王の「中継ぎ」としての手段であり、信西入道としても美福門院の要求を断る事はできなかった為である。こうして後白河天皇は退位し後白河上皇となり、後白河院政派と二条親政派とが分かれ対立構造が出来上がってしまったのである。その対立の中で清盛は非常に難しい舵取りを迫られるのであった。】

後白河帝による保元の新政は信西入道と平氏一門による協力体制によって進められてきましたが、美福門院派＝二条親政派の登場によって清盛以下平氏一門は難しい立場となっていくのです。

以下次号に続く（征阿）

二条天皇

# 残った残った、女人禁制

京都府舞鶴市での大相撲春巡業、土俵上で挨拶中に倒れた市長に救命活動をする女性に対して「土俵から降りて」とアナウンスした日本相撲協会の対応に「女性差別」か「伝統」かと論議を呼んでいます。人命救助の最中に伝統を持ち出しては誰の賛同も得られませんよね。

男女共同参画理念に反するとか、公益財団法人が性差別するとはけしからんと主張する方には「そんなけったくその悪いもん観に行かない」という方法はどうでしょう。ＮＨＫのテレビ中継で観客席が映ると多くの女性が見物されています。その姿が全部消えたら、大相撲は興業的に成り立ちますか。フフフッ。

一方、相撲には神事としての性格があり、天下泰平・子孫繁栄・五穀豊穣・大漁などを願って相撲を行う神社も多く在ります。

豊穣の象徴として祀られてきた神はたいてい女神と考えられています。ですから、男性が祈った方がよく願いを聞き届けてくださると信じられてきたのです。日本神話の最高神、天照大神（あまてらすおおみかみ）も女神ですよね。神話の女神はどうも嫉妬深いというのが定説になっていて、男性が祈っている場に女性が現れるのを嫌がるようなのです。

最初に市長に心臓マッサージを施した女性に「感謝状などのお礼を」という申し出でがありましたが、「当たり前のことをしただけなので、そっとしておいてほしい」と辞退されました。このあっぱれな女性に嫉妬する女神はいないでしょう。

普段は優しく慈悲深い女神が怒り狂う場合があります。それはウソをつかれた時。

市長が挨拶の最中に「トイレへ行って、服を着替えていたので（倒れたのを）知らなかった」と言った巡業部長ですが、会場の奥でポケットに両手を突っ込んで一大事に傍観していた映像が流れてしまいました。

市長は舞鶴へ巡業を招いた勧進元。その人の挨拶なら、羽織袴に威儀を正して一番前で聴くのが礼儀というもの。女神の怒りがまだまだ続きそうな気が・・・。

本場所の初日前日には土俵祭で神を迎え入れ、千秋楽に送り出します。文化人類学者の鈴木正崇氏は「先に神を送り出してから表彰式をすれば良い」と提案されています。なるほど、神がおられる間は神聖な場として力士などの関係者以外の俗人は入れませんが、おられない土俵はただの土の塊。誰でも入れるわけです。

千秋楽の神送りの儀式は、神酒廻（みきまわ）しと手締めの後、行司を胴上げします。こんなユニークな神事こそテレビで観せて欲しい。

それにしても、日本人力士がモンゴルをはじめ外国人力士にコロコロ負けています。どこ国の神を迎えているのですかねぇ。

いや、この表現は不適切。刑事訴追の恐れはないでしょうが、発言を控えさせていただきます。

迷走坊

# 観経物語（１１７）

正宗分（しょうじゅうぶん）その71

散善（さんぜん）中品下生その１

《本文》

中品下生とは、若し善男子・善女人ありて、父母に孝養し、世の仁慈を行なわんに、此の人、命終わらんと欲する時、善知識の為に阿弥陀佛の国土の楽事を広説し、亦法蔵比丘の四十八願を説くに遇わん。此の事を聞き已わりて、尋いで即ち命終わるに、譬えば壮士の臂を屈伸するが如き頃に、即ち西方の極楽世界に生まる。生れて七日を経て、観世音及び大勢至に遇い、法を聞いて歓喜す。一小劫を経て、阿羅漢と成る。これを中品下生の者と名づく。これを中輩の生まるる想と名づけ、第十五観と名づく。

《意味・訳文》

中品のうちの下の法の往生の仕方とは以下のごとくの様子である。もし善男子・善女人があって、父母に孝行して大切にし、仁(師や年長者を敬う)慈(生き物を殺さず生かす)と言うような世間の道徳を守るような善人があって、この人が命終わろうとする時、佛の教えを説き、善き導きをなす人に巡り会い善人の為に阿弥陀佛の国土での楽しさを説き明かしてくれ、また阿弥陀佛の前身である法蔵比丘(＝菩薩)の四十八の願と行についても説明してくれて、極楽の成り立ちや、なぜ極楽に往生できるかなどを解き明かしてくれるのである。是を聞いたあとにまもなく命を終えたならば、その人はあたかも元気のよい人が臂を屈伸するような素早さで、たちまち西方の極楽世界に生まれるであろう。生まれてから七日を経たのち、観世音と大勢至の菩薩に遇い、妙法を聞いて歓喜し、そののち一小劫を経て阿羅漢の位に達する。これを中品下生の者と名づける。以上を中品の等級に生まれた者についての観想と名づけ、第十五観と名づけるのである。

《私訳》

この下品下生の段では、生きて世間では善人と呼ばれた人達の極楽に往生する有り様を観照する。

世間で善人と言われた人は、自信と確信をもって前向きに生きた人であるが、これら世間の常識という道の上を通ってきたにすぎないので、死と向き合うこととなり、未知の不安と苦悩に出会うのである。

救いはただ一つ、出世間の教えを説く佛教者に出会い極楽往生を勧められることにある。このことは、未来の凡夫である現代人を言っているのです。

《妙星斎》